東京大学見学会(2024.7.24～26)

本校では、夏休みのはじめ、高校１・２年生 80 名を対象に、「本物の学問に触れる、最先端の学問に触れる」ことを目的として、東大で教えているラ・サールＯＢの研究室を中心とした見学会を行っています。今年度は 12 個の研究室にご協力いただき、生徒たちは、その研究室の中から自分の興味のある３つの研究室を選び、見学しました。

初日は移動日のため研究室見学は行わず、現在東大に通っている 7 名のラ・サール OB にキャンパスを案内してもらいました。その後、「東大の愉しさ」をテーマとして講話をしてもらい、高校生が自由に先輩たちに質問できる時間を設け、大学生活について質問をしたり、勉強方法のアドバイスを聞いたりしました。引率教諭に挨拶に来ただけという OB にも飛び込みで参加してもらい、最終的には 15 名の OB と話をすることができ、とても盛り上がりました。また、AIM 研究所の所長である宮﨑徹先生には「新しい医療への挑戦-治らない病気を治すために-」というタイトルで講話をしていただきました。腎臓病をはじめとする治らない病気を治すためのカギである AIM についてのお話の中で、宮﨑先生自身のこれまでの行動選択の指針を教わり、生徒たちはひとつでも多くのことを吸収しようと熱心に話を聞いていました。

２日目は、医学部・農学部・法学部・工学部・生産技術研究所・東洋文化研究所・宇宙線研究所・地震研究所から２つの研究室を選び、見学をしました。生徒たちは、メモを取りながら話を聞いたり、実験の様子を見たりして、質疑応答の時間には鋭い質問を先生方にぶつけていました。夜は、東大第２食堂をお借りして、社会人を含むラ・サール OB との交流会を行いました。23 名の OB が来てくださり、生徒たちは食事を摂りながら OB と積極的に交流し、たくさんのアドバイスをいただきましたが、もっと話をしたかったという人が多くいました。

３日目は、建築学科・物理学科・薬学系研究科・史料編纂所から１つ選び見学をして、見学会を終えました。

出発前に生徒たちを集めたとき、「充実した見学会にするために必要なものは、自らの学ぶ姿勢である」ことを伝えました。見学会後に提出してもらった生徒たちの感想文を読むと、彼らは私たち教員の思いをしっかり受け止めて、事前に下調べをし、熱心に話を聞き、多くのことを学んでくれています。この見学会は、生徒諸君にとってたいへんよい経験になったようです。彼らは、勉強に向かう姿勢、文理選択、進路決定、社会人になってからと、この先の様々な場面でこの見学会のことを思い返してくれることでしょう。担当者としても、見学会を実施できてよかったと強く感じています。

全体を通して印象的だったのは、先生方を含むラ・サール OB との交流です。多くの OB が生徒のために集まってくださいました。後輩のために力を貸そう、協力しようとする OB の多さと、その熱量に改めて驚かされました。そして、このような本校ならではの空気を大事にしていきたいと感じました。

最後に、生徒の感想文を紹介します。

「現在、自分が学習していることの小ささを実感し、学問の奥深さ、幅広さに少し不安を覚えつつ、今学んでいることがすべての基礎になっていることを感じた。がむしゃらに今の勉強に向かっていこうと感じた。」

「見学会に行って、家に持ち帰ったルーズリーフ 10 枚分では到底得られない感動と展望を持つことができた。」

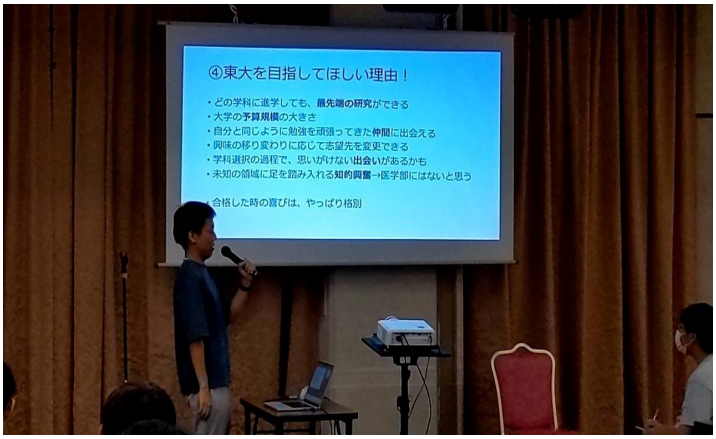
「見学会を通じて学んだことは、興味がないのは知らないから、ということだった。大学の先生方からは、各分野の面白さを教えていただいた。いずれ、私がその立場で後輩に説明できるようにしたい。」

「自分の進路が揺らいでしまうくらい、どの講義も興味深かった。しかし、精一杯悩みぬきたいと思う。」

「やはり理Ⅲにいきたい。その意思を再確認できた。自分が努力をすることで、色々な人を助けたいと思う。」

初日、キャンパス案内役の本校 OB 紹介

初日、本校 OB（東大 2 年生）の講話



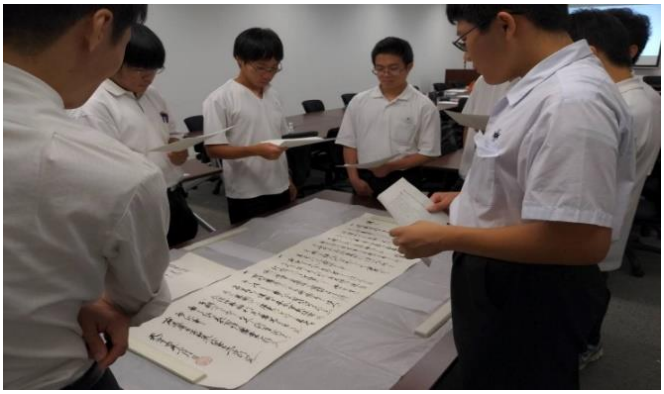
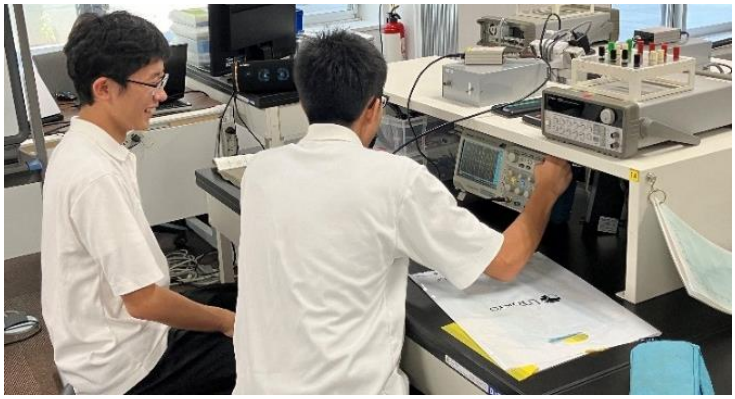
初日、OB との交流会

2日目午前、医学部講話（医学部一号館にて）

2日目、宇宙線研究所

2日目夜、交流会

3日目、史料編纂所



3日目、若本研究室(物理)